

共同研究【若手】 ● 内陸アジアの宗教復興  
—体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開 (2010-2012)



ブリヤート人のシャーマニズム儀礼(モンゴル、島村一平撮影)。

### 宗教的多層性と社会主義

社会主義を経た宗教動態は、1990年代以降の人類学研究においてひとつの重要な研究テーマとなってきた(たとえば Hann 2010)。その重要性は現在も減じていないが、社会主義体制の終焉や改革から20年余りを経て、社会主義と宗教の関係性という観点からのみでは、現在の諸宗教の復興メカニズムをとらえることができなくなっている。現代における宗教動態は、地域性と越境性が同時に顕在化するという特徴をもっており、社会主義以前からの地域社会の展開をふまえつつ、グローバル化のなかで複数の国家・民族・宗教間をとらえることが必要とされている。

こうした状況をふまえて本共同研究は、社会主義を経た内陸アジアとその周辺地域に着目し、宗教復興のメカニズムを明らかにすることを目指している。内陸アジアとは、テュルク系の人々が多く暮らす中央アジアから、モンゴル、チベットにかけての地域をさす。内陸アジアおよびその周辺地域は、シャーマニズム、イスラーム、仏教、ボン教といった複数の宗教が、部分的に重なり合いながら信仰される宗教的多層性を特徴とし、歴史的にひとつのまとまりをもった世界であった。しかし、19世紀までに近代国家によって分断され、20世紀には複数の国家のもとで社会主義体制を経験した。その後のソ連における社会主義体制の終焉や中国の改革解放を経て、内陸アジアおよび中東や欧米など旧社会主義国以外との交流がさかんになった。こうした状況下で、複数の宗教が互いに交錯しつつ新たな展開をみせるようになったのである。

本共同研究は、若手研究者8名により構成され、昨年秋以降3回の研究会を開催してきた。第1回は主に中国、第2回は旧ソ連領中央アジアに焦点をあて、計5報告が行われた(これ

らの成果については藤本 2011を参照)。今年6月には第3回研究会を開催し、地域社会の再編と宗教現象の関係性をとらえた2報告と総合討論が行われた。以下では第3回研究会を中心に述べ、今後の展望を示したい。

### 再イスラーム化—市場経済への適応のなかで

ソ連の反宗教政策が緩和されて後、中央アジア諸国でイスラームへの関心が高まっていることは「再イスラーム化」と呼ばれる。クルアーンやハディースへの回帰という中東に始まるサラフィー主義的な運動とともに、ムスリムとしての「民族伝統」への回帰、すなわち土着的信仰をイスラームの文脈で正当化するプロセスがみられることが、中央アジアの特徴である。菊田悠(北海道大学)の「脂と功德とろうそくの灯:中央アジア定住地帯ムスリムの暮らしと死者霊」は、こうしたプロセスを職業集団の事例から分析したものであった。

菊田報告によると、ウズベキスタンのリシトン(19世紀から陶業の町として知られ、ソ連時代には国営工場で、ウズベキスタン独立前後からは陶工自身の工房と窯で陶器が作られるようになった。ウズベク人やタジク人の陶工たちは、陶業の守護者とされるイスラーム聖者や、亡くなった親方の霊のために祈る儀礼を行う。クルアーンを誦読するという善行の報酬が聖者や親方の死者霊に与えられるよう祈ると、死者霊も生者とともアッラーに祈り、神から生者に恩寵がもたらされると信じられている。窯焼きの失敗は聖者や親方の霊を怒らせたためであり、儀礼実践は真の陶工を分ける指標とみなされる。

死者霊と交流するため、儀礼的食事を作ることによって脂を香らせる、ろうそくの灯を捧げるなど、儀礼の一部はテュルク・モンゴル系のシャーマニズムに酷似し、イスラーム伝播以前からの信仰を含む。このため、一部のイスラーム知識人らによって批判の対象となっている。しかし、善行への報酬というイスラーム性を保証する説明様式が生み出されることによって、儀礼は存続している。ソ連時代の工場生産から作家性が重んじられる個人製作へと移行し、市場経済のもとで外国人観光客への販売が重要となるなかで、聖者や親方の霊は、陶業の成功を祈る対象としてばかりではなく、陶工個人のインスピレーションの源ともみなされていると菊田は指摘する。市場経済への適応のなかで、ローカルな宗教儀礼がイスラーム性を保証され、職業倫理を支えているのである。

### シャーマン増殖現象—民族と国境をこえて

シャーマニズムに加えて仏教が信仰されるモンゴルでは、国家政策のもとで仏教が復興する一方、民間でシャーマニズムの活性化が生じた。「ポスト社会主義期のモンゴルにおけるシャーマニズムの活性化」と題する島村一平(滋賀県立大学)の報告によると、1990年代初頭の社会主義の崩壊以降、モンゴルに暮らす少数民族としてのブリヤートのあいだでは、

シャーマンが次々に誕生する「増殖現象」が起きたのである。

シャーマンへの道を歩み出すきっかけは、「オグにねだられる」、すなわちシャーマンの霊的ルーツである祖霊に憑依され病いを患うことである。ここで重要なのは、オグ(ルーツ)は一般に父系の系譜をさすにもかかわらず、現代のシャーマンにとってのオグは双系的で、かつ異民族出自の霊を含むマルチエスニックなものだということである。

この背景として島村は、17世紀以降のロシア人入植や、20世紀にブリヤート人男性の約半数が「日本のスパイ」として粛清されたことなどにより、ブリヤート人女性とロシア人、ハルハ＝モンゴル人、中国人との混血が増加したことを指摘する。社会主義体制から移行後のモンゴルでは、純血主義が高まりをみせ、モンゴル人のみならずブリヤート人も「ルーツの病い」にとりつかれた。シャーマニズムは、霊の憑依をとおして、父系の系譜ではブリヤートではない人々を「ブリヤートのシャーマン」として位置づけなおす装置として活性化したのである。さらに島村は、国境によって隔てられたロシアとモンゴルのブリヤート集団間を、この新たなシャーマニズムが結びつけつつあることも指摘した。シャーマニズムとは常に新たな伝統を創造するものであり、社会的他者となった人々が自らを再統合していく術として機能しているのである。

### 今後の展望——諸宗教の境界とその越境

以上の事例研究や筆者を含めた共同研究員の調査をふまえて、内陸アジアとその周辺地域全体について総合討論を重ねた結果、次の3つの論点がみえてきている。第1に、諸宗教が社会再編の媒体として果たす役割である。社会主義政策は経済・社会的基盤の変革をとおして宗教実践を消滅させることを目指したが、むしろ現在では経済・社会的基盤の変化をふまえた上で、宗教実践をとおして社会を再編する動きがみられる。とりわけ2000年代以降、グローバル化がますます進展するなかで、地域に生きる人々が社会を再構築していく術として宗教は重要性を増している。今後は国家制度、コミュニティ、個人という各レベルにおける宗教動態について、宗教による差異にも着目しつつ、さらに考察を深めていく予定である。

第2に、国境を越えて、各宗教のネットワークが創造され再編されていく過程が明らかになりつつある。社会主義体制の終焉や改革以降、同じ宗教を信仰する他国の人々とのつながりが生まれ、イスラーム、シャーマニズム、ボン教、チベット仏教、上座部仏教など、各宗教のネットワークが広範に構築された。各宗教ネットワークに基づく外国資金の提供や留学は、宗教復興の基盤であると同時に地域社会そのもののあり方を変えていく可能性をもっている。カザフを対象とする筆者の調査からは、国境を越えた人の移動が拡大するに



治療と占いを行うカザフ人ムスリムのシャーマン(モンゴル、藤本透子撮影)。

つれて、諸外国から布教されるイスラームのあり方をめぐって地域社会内で議論が生じ、留学を中止したり国内・地域内で宗教職能者を育成するようになるケースも生じていることがわかっている。こうした傾向も、今後の宗教動態を考える上で重要な点であるだろう。

第3に、地域社会における諸宗教の関係性について、議論を深めていきたい。国境と民族をこえて展開する複数の宗教ネットワークは、特定の地域社会においていかなる関係性を構築しているのだろうか。宗教的多層性を特徴とする地域社会では、宗教間の境界が存在すると同時に、複数の宗教の相互浸透がみられる場合も少なくない。筆者の最近の調査からは、復興されたモスクと仏教寺院はそれぞれカザフ人ムスリムとモンゴル人仏教徒が集まる場所だが、バクスと呼ばれるカザフ人シャーマンのもとには、モンゴル人、中国人、ロシア人など多様な出自の人々が飲酒治療や行方不明者の所在占いなどを依頼することがわかっている。こうしたシャーマンは、グローバル化にともなって旧社会主義国でさまざまなスピリチュアリティやオカルトがさかんになっていることとも関連が深い。研究者個人は特定の宗教を対象としている場合が多いが、宗教を専門とする複数の研究者が集う本共同研究の特徴を活かし、各宗教ネットワークの交錯、諸宗教のあいだの境界とその越境のダイナミズムを明らかにしていく予定である。

### 【参考文献】

- Hann, Chris (ed.) 2010. *Religion, Identity, Postsocialism*. Haale/Saale: Max Planck Institute for Social Anthropology.  
藤本透子 2011「社会主義をへた宗教復興のゆくえ」『民博通信』132:26-27。



ムスリムの陶業工房(ウズベキスタン、菊田悠撮影)。

### ふじもと とうこ

先端人類科学研究部機関研究員。専門は中央アジアの文化人類学、ポスト社会主義の社会再編と宗教動態。著書に『よみがえる死者儀礼：現代カザフのイスラーム復興』(風響社 2011年)、論文に“Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period” In Yamada, Takako and Takashi Irimoto (eds). *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies* (Hokkaido University Press, 2011) など。